
妖精のきまぐれ

kotorinakisekai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精のきまぐれ

【Nコード】

N9124P

【作者名】

kotorinakisekai

【あらすじ】

妖精が散歩していると山小屋で男が困っていた。金が底を尽きたというのである。

妖精はその男に「宝の埋まっている場所を知っているけど、知りたくない？」とたずねた。別に助けようとした訳ではない。単なる気まぐれだ。

【この作品は他サイトと二重投稿しています】

妖精が山の中を散歩していた。すると、山小屋の前に座り込んでいる男を見つけた。

「何をぼんやりしているの？」

妖精はからかうような口調で男に話しかける。

「妖精か……。金が底について困ってるんだよ。今晚の食事もない状態だ」

男が心底困っている風なのがおかしくて、妖精はカラカラと笑う。
「ねえ、そんなにお金に困っているなら私が何とかしてあげましようか？」

「漂うように生活しているだけの妖精に何ができる？」

男は妖精が自分をからかっているのだと思った。妖精が人助けをするなんて聞いたことが無い。

「私は山に宝が埋まっている場所を知っているの。あなたにその場所を教えてあげてもいいわ」

妖精はそう言って男に笑いかける。男は妖精のその申し出を怪しく思った。妖精にそんなことをするメリットは何一つない。何か難しい条件を付けてくるに違いない。

「……場所を教える代償は何だ？」

「私は宝石や金を見るのが好きなの。でも、私に地中に埋まっている宝は掘り起こせない。だから、あなたが掘り返して私に宝を見せてくれれば、それが私の報酬になるわ」

男はとても信じられなかったが、このままここに座っていてもどうにもならない。当てが無いよりマシだと思って、妖精の申し出を受けることにした。結果、妖精にからかわれるだけに終わったとしても……。

「ここよー」

妖精に連れられて宝があるという場所につくと、そこは男がよく

狩りをする場所だった。こんなところに宝が埋まっているなどまず信じられない。

男は半信半疑ながら、妖精に言われたところをシャベルで掘り返した。すると、そんなに掘り返さないうちに、本当に宝石や金塊を掘り当ててしまった。

「そ……そんな馬鹿な！」

「ああ、やっぱり綺麗ね。サファイアやルビーの光もいいけれど、金の輝きは一段と綺麗だわ」

妖精はそう言つと、宝石の周りを楽しそうに踊り始めた。

「本当に俺がもらつていいのか？」

「ええ、いいわよ。たまにあなたの小屋にこの宝を見に行くとと思うけど、その程度のわがままは許してね」

「ああ、分かった！」

その程度の注文は何でもない。これだけあれば、少なくとも食うには困らない。男は早速市場に行つて、食料を買い込んだ。

それから数日後。男の小屋にまた妖精が尋ねてきた。

「こんにちは」

妖精は窓から入つてきて、斧の手入れをしていた男に話しかけた。

「お前か。宝石を見に来たのか？」

「違うわ。また宝を見つけたから掘り返してくれない？」

「なに！ また見つけたのか！」

男は喜んで妖精について行き、また宝を掘り返した。

それからというもの。妖精は何度も宝を掘り返してくれと頼みに来た。そのたび男は宝を掘り返し、気がつけば一生遊んで暮らせるほどの宝を手に入れていた。

季節は冬になり、男は斧を研いでいた。

「こんにちは。また宝を見つけたわ」

妖精がまた男を訪ねてきた。

「お前か。しかし、今まで見つけたので十分生活できる。もう冬になつたし、宝を掘り返すのはもういいよ」

「それはダメよ」

妖精は男の申し出を断る。

「ダメって……。お前だつて宝を見つけなくてすんでいいじゃないか」

「あなた何か勘違いしていない？ 私は別にあなたのために宝を見つけていたのではないのよ？ 私が宝を探すのは私が宝を見るのが好きだったから。あなたに宝石を全部渡したのは、掘り返してくれる報酬として手渡してただけ。だから、もう掘り返してくれないというのなら、今まで手に入れた宝石は全部返してもらうつわ」

「それは困る！ これが無くなれば無一文になつてしまう！」

「そんなの知らないわ。もともとお金がなかったんだから、前の状態に戻るだけじゃない。今まで楽しく暮らせたんだからそれで十分でしょ？」

妖精はそう言うつと、歌いながら踊り始めた。男にはその姿が自分を馬鹿にしているように見えた。実際馬鹿にしているのだろう。妖精とはそういう生き物だ。

男は部屋の中にある斧に手を伸ばした。

「お前が死ねば宝は全部俺のものだ！」

男は踊っている妖精にめがけて斧を振りおろした。妖精は眩しい光とともに消えてしまった。男は妖精を殺したと思った。

「ハハ！ ざまあみろ！」

「何がざまあみろなの？ クスクス……」

妖精の笑い声が小屋の中で響いた。しかし妖精の姿はない。

「馬鹿ね。妖精を人間が殺せるとでも思ったの？ 本当におめでたいわ」

「すまん！ 謝る！ だから宝を奪うのだけは勘弁してくれ！」

「あら？ じゃああなたの命を奪うのは構わないの？」

妖精のその言葉に男は悲鳴を上げてしゃがみこむ。その様子を見

て妖精は再び笑った。

「馬鹿じゃないの？ そんなに慌てて。あなたへの制裁はしっかり考えさせてもらうわ」

妖精の声はそれで消えた。男は殺されなかったことに安堵して、その日は寝ることにした。

次の日。男はベッドから身を起したが、いつもと様子が違う。昨日まであんなに朝日を反射していた宝石の光が今日は無い。男が慌てて宝石の置いてあった場所を見ると、そこには土の塊が大量にあった。

「宝石を奪うのはかわいそうだから、宝石を土に変えてやったわ。注文道理でしょ？ あははは！」

小屋の中に妖精の声が響いて、妖精のきまぐれは終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9124p/>

妖精のきまぐれ

2011年8月3日03時23分発行